

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520793

研究課題名(和文) 稲垣家旧蔵地図・地球儀の解析を主とした江戸後期の世界地図編纂事情究明に向けた研究

研究課題名(英文) A study about the world map compilation project investigation in the late Edo period consisting mainly of analysis of the maps of northern borders and world maps in the Inagaki Collection.

研究代表者

吉田 厚子 (Yoshida, Atsuko)

東海大学・総合教育センター・教授

研究者番号：50408069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、稲垣家旧蔵の北辺図・世界図及び地球儀や関連文献の全容解明のために、津市図書館等所蔵関連史料の調査・整理・分類作業を継続的に行い、同史料の解析作業を進めた。その結果、第一に、「稲垣家旧蔵地理学関連史料仮目録」が形として整いつつある成果を生んだ。第二に、稀覯の地図・地球儀等器物史料の一部をデジタル公開化するための基盤が形成された。第三に、江戸時代知識人による地理的情報集積過程の実態解明に関わる成果を学会での口頭発表や論文文化を通して公表した。

研究成果の概要(英文)： In order to try to obtain the full picture of the maps of northern borders as well as world maps and their relevant literature in the Inagaki Collection, the relevant materials among that collection available in the Tsu City Library have been investigated, classified and analyzed. As a result, (1) a preliminary form of "the tentative catalogue of materials relating to maps and geography of the Inagaki Collection" is under compilation; (2) the groundwork for digitalizing a part of objects like rare maps and a globe has been laid; (3) the results of the studies on the accumulation process of geographical information by Edo intellectuals have been made public through reading papers as well as their publication.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：交流史 日蘭文化交流史 日魯文化交流史 江戸時代 地図 地球儀 国際研究者交流 オランダ

1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国の知識人が、北方及び世界の地理的情報を直接獲得するためには、当初は出島のオランダ人からの口頭による教示によらざるを得なかった。しかし次第に、オランダ語の修得が進むと、オランダ語の書物(以下蘭書と略記)の読解・翻訳作業を通じて、新たな地理的情報の獲得が可能になっていった。また、オランダを中心とする西洋で製作された地図・地球儀が舶載されたため、これを模写・謄写し、あるいは自ら製作する者も現れた。こうして19世紀前半ともなると、自力での情報収集能力をもった者が、高度とは言わないまでも、出現してくる。一方当該期には、ロシアからもロシア使節及び帰還漂流民により将来された地図・天球儀・地球儀が、知識人たちに注目されて模写された。こうした知識人の中には、大槻玄沢のような蘭学者や、大坂商人間重富、伊勢商人稲垣定穀(1764～1835)などが含まれていた。ところが、オランダ・ロシアからの海外情報受容という、19世紀前半に生じた新局面を担った、かかる知識人に着目して、どのような北方に関する地理的情報が集められたのか、またその分析内容は如何なるものであったのか、何らかの為政レベルで活用されたのか否か等については、これまで殆ど明らかにされていない。従って、日蘭・日魯交流史の視点から、当時得られた北方及び世界に関する情報内容を、例えば、未公開史料を多く含む、稲垣家旧蔵(津市教育委員会及び津市図書館)の北辺図・世界図及び地球儀や関連文献に焦点を絞り、徹底的に調査・解析して解明することは、19世紀前半における海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態を浮彫にする上でも極めて意義がある。

(2) 但し、従来の我が国の関連研究を回顧してみた場合、地図史の観点からは、秋月俊幸の大著『日本北辺の探検と地図の歴史』があるが、通史的叙述に止まり、当時を代表する北方研究者、大槻玄沢については、本書の中ではただ一箇所而言及されるだけで、しかも工藤平助を紹介した注に同じ仙台藩の者として登場するのみである。同じく北方研究者の間重富も、伊能忠敬の節で、天文方との関連で一度触れられるにすぎない。海野一隆の一連の研究を集約した『東西地図文化交渉史研究』は、地図学の権威としてさすがに手堅く、教えられるところも多いが、北方問題へ対処するための地理的情報という観点からの分析はない。一方、蘭書におけるロシア記事の内容検討に至っては、殆ど着手されていない。蘭書とその翻訳書に関するリストは、例えば『鎖国時代 日本人の海外知識 - 世界地理・西洋史に関する文献解題 - 』に所収されているが、各書の内容として、具体的に何が書かれているのかについての詳細は、同書からは全く得られない。加えて、稀覯史料と明らかに位置づけられ、日蘭・日魯文化交流

史研究における新局面開拓に不可欠な、伊勢商人稲垣定穀が蒐集乃至は作製した北辺図及び世界図、地球儀、測量器具、版木、書籍、彼自身の研究著作については、具体的な調査が全く進行しておらず、研究代表者の吉田厚子と連携研究者の吉田忠のみが、一部史料を利用しているにすぎない。なお、海外の関連研究については、地図等の書誌学的研究はあるものの、文化交流史的視点から分析したものは、管見の限り皆無である。

(3) 内外における上記(1)(2)で言及した背景の中で、研究代表者は、長年にわたって大槻玄沢研究に従事し、当時の知識人たちが得た北方及び世界の地理的情報の一端を明らかにしてきた。更に続けてこれまでの科学研究費等による研究で、玄沢が『環海異聞』編纂時に利用乃至は作成した地図類で、従来不明とされてきた史料の悉皆調査、玄沢を中心とする地理学者らがオランダ・ロシアからの情報を受容して作成した地図・地球儀の解析を継続的に行った。それらの研究過程で、北海道大学附属図書館編『日本北辺関係旧記目録 北海道・樺太・千島・ロシア 』(北海道大学図書刊行会、1990年)には未収録の、間重富・鷹見泉石・稲垣定穀関係史料などにも遭遇するに至った。この内、稲垣定穀については、京都では天文学を橘南谿に、暦術算数を小島好謙に師事し、江戸では本田利明・本田芳信と交わって天文地理学に精通し、出身地伊勢国などの実地調査・測量を自ら行い、各地の多数の地図を作成した洋学史上の重要人物であったこと、研究の一環として、大槻玄沢周辺に存在し利用されていた地図・史料で、現在不明とされてきた史料を記録に留めていたことが明らかとなった。これを契機として、日蘭・日魯交流史の視点から、当時得られた北方及び世界に関する情報内容を文化史的に解明するために、特に稲垣家旧蔵の北辺図・世界図及び地球儀や関連文献に焦点を絞り徹底的に調査・解析することが最優先課題となったのである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、19世紀前半の知識人が、日本の北方(北辺・ロシア)に関する地理的情報収集を契機として理解した世界情勢の実態を、日蘭・日魯交流史の視点から把握し、当時得られた情報内容の意義を、文献のみならず製作された地図・地球儀などの器物の分析を通じ、解明することを主たる目的とする。

(2) 特に上記(1)の目的を実現するために、稀覯史料でありながら従来殆ど利用されてこなかった、稲垣家旧蔵の北辺図・世界図及び地球儀や関連文献に焦点を絞り、津市教育委員会及び図書館での同史料の悉皆調査及び整理と解析作業を通じ、それら史料群の全容の解明を目指す。

(3) 上記(2)の作業を進展させ、一般の利用に供するために、『稲垣家旧蔵北辺図・世界図・地球儀及び関連文献目録』の作成や地図・地球儀等器物史料のデータベース化の実現に向けた研究を進める。

(4) この研究は、19世紀前半における海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態を明らかにし、結果的に当時の為政者及び知識人たちの思惟構造の解明や日本の世界地図作成史研究、延いては日蘭・日魯文化交流史研究の新展開に貢献することも視野に入れる。

3. 研究の方法

(1) 稲垣家旧蔵の北辺図・世界図及び地球儀や関連文献の全容を解明するために、研究代表者の吉田厚子と連携研究者の吉田忠の双方は、津市教育委員会及び津市図書館で、関連史料の悉皆調査を行い、目録化に向けた分類・整理作業を併行して、既存の稲垣家史料調査の成果に加えていく。

(2) 19世紀前半における海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態を明らかにするためには、既存及び新規に蒐集した稲垣家史料と蒐集済みの大槻玄沢史料とを関連づける必要がある。研究代表者は既に、稲垣家史料の中には、大槻玄沢周辺に存在し利用されていた地図・史料で、現在不明とされてきたものが存在していることを発見しているので、それら史料を相互に比較検討し、壺書和解御用の職にあった大槻玄沢の海外情報受容の知識系統を明らかにすることで、為政者の世界地図編纂事業の全容の一端を解明する。

(3) 蒐集した稲垣家史料に関する解析作業を進展させるために、連携研究者及び研究協力者の岩井憲幸から、蘭書との対比やオランダ側の世界情勢に関する知識の分析検討に加え、地図・地球儀作成の基礎にある天文学やオランダ語・ロシア語に関する専門的知識の提供を受ける。

(4) 明治大学図書館所蔵の蘆田文庫等をはじめ各地に点在する関連史料や、解析に必要な関連研究文献を国立国会図書館や、国内の各研究機関・図書館等で調査・蒐集する。その機会を利用して、成果構築に向けての研究打ち合わせを行う。

(5) 地図・地球儀等の器物史料については、データベース化に向けた撮影・画像処理作業を進めていく。かかる作業に要する撮影機器類は、研究代表者が嘗て受領した科学研究費補助金により完備することができたので、基本的には研究代表者がそれを利用してこの作業を行う。但し、専門的技術を必要とする大型地図等の撮影・画像処理に関しては、専

門業者に委託する。

(6) オランダ経由で日本の為政者や知識人たちにもたらされたロシア知識等の全容を明らかにするために、研究代表者乃至は連携研究者が、オランダのライデン大学、ハーグ国立図書館等での現地調査を行い、オランダ側の世界情勢に関する知識の分析を行ったり、蘭書を利用して作成したことが特定できる史料の原本との対比をしたりする。この蘭原本との比較対照により、当該地理情報が原本記載内容のどの部分を採用しているか、あるいは誤訳・誤読があるか否かなどを検討し、訳者の思想や読解力を判断する手がかりを探りつつ、知識人の思惟構造の解明に裨益させる。またオランダでの史料調査の機会を利用し、地図や当時のオランダ側のロシア知識について、オランダ人研究者の専門的意見を聞き、アドバイスを受ける。

(7) 上記(1)～(5)の研究作業を着実に継続し、『稲垣家旧蔵北辺図・世界図・地球儀及び関連文献目録』の作成や地図・地球儀等器物史料のデータベース化の実現を目指す。また上記(6)での成果も加味し、当時の為政者及び知識人たちの思惟構造の解明や世界地図作成史研究、日蘭・日魯文化交流史研究における新局面の開拓に寄与できるようにする。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

研究期間全体を通じて、稲垣家旧蔵の北辺図・世界図及び地球儀や関連文献の全容を解明するために、津市図書館等所蔵関連史料の調査・整理・分類作業を継続し、新規購入した「洋学史関連図書」や国立国会図書館等で調査・蒐集した研究文献を駆使して、稲垣家史料に関する解析作業を進展させた。その結果、「稲垣家旧蔵地理学関連史料仮目録」が形として整いつつある成果を生むとともに、一部史料のデジタル公開化に向けた基盤が形成された。

より具体的な成果

研究代表者の吉田厚子は、稲垣家旧蔵地理学関連史料の目録化・公開化に備えて、津市図書館等で調査・蒐集した史料について、データ化・デジタル化した史料画像を分類・整理し、順次パソコンに保存していく作業を継続した。また、蒐集済み関連史料を、各種世界図や洋学史関連図書・文献等を駆使して緻密に比較・解析し、各史料の内容やそれらが具有する史的意義、史料系統などの解明を目指す作業を進展できた。加えて、江戸時代における知識人の地理的情報集積過程の実態解明に関わる成果の一部を、毎年、学会において口頭で順次公表していった。以上の成果については、論文を作成中である。

連携研究者の吉田忠は、当時の知識人の北方認識を知る手がかりとして、稲垣文庫中の北方関係史料を調査し、稲垣定毅自身の

随筆『凸頭彙稿』と志筑忠雄訳『羅西亜来歴』に着目した。殊に後者は『魯西亜志附録』という表題でも知られるもので、内閣文庫、静嘉堂文庫、鮎澤文庫（横浜市立大学図書館）、洲本市立図書館蔵の現存写本とテキストの照合をした。また同書はファレンタイン『新旧東インド志』(F. Valentyn, *Oud en Nieuw Oost-Indien*, 1724)第1巻の記事の翻訳と言われるので、そのオランダ語原文と対照して、同書が原本であることを確認した。さらに、同書は志筑の晩年の訳述『二国会盟録』と密接な関係があることが判明した。以上の点につき論文を作成中である。

国際学术交流の進展のため、吉田忠をドイツ及びオランダに派遣した。吉田忠は、現地にて、地図作成に不可欠な天文学知識の進展に関連し、アピアヌス、ゲンマ・フリジウスの天文学、観測器具製作に関する基礎文献を調査・収集した。特に、ブラウ、ファン・ケーレン、オッテンスなど17世紀後半から18世紀前半のアトラスについて実物調査し、新井白石がシドッチ尋問に際し利用したブラウの壁掛け地図の背景について検討した。

一般国民への成果発信についても考慮した。吉田厚子は、将来的な博物館等との企画展の共催を目指して、神戸市立博物館や津山洋学資料館、東京国立博物館で催された関連企画展を巡見し、各学芸員とも情報交換をした。吉田忠は、一般向けの月刊誌『東京人』に寄稿し、研究成果の一部を分かり易く論じた。

(2)得られた成果の位置づけとインパクト

稀覯史料と明らかに位置づけられ、日蘭・日魯文化交流史研究における新局面開拓に不可欠な、伊勢商人稲垣定穀が蒐集乃至は作製した北辺図及び世界図、地球儀、測量器具、版木、書籍、彼自身の研究著作についての具体的な調査は、本研究で着手されるまでは、全く進行していなかった。従って、同史料群の全容をほぼ把握し、その目録化やデジタル公開化に向けた基盤を整備した本研究は、洋学史はもとより科学史研究等に携わる多くの研究者のために、同史料群の有効活用の道筋を開く成果を生んだと位置づけられる。

この成果をさらに発展させ、同史料群活用の便がはかられれば、江戸時代後期におけるオランダ・ロシアからの海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態がより一層明らかにされ、19世紀前半以降の我が国の西欧文化受容の新たな実態を、日蘭・日魯文化交流史の視点から呈示できることになるはずである。その結果は、日本の伝統文化形成の在り方を歴史的に見つめ直す上で資するところ多々あることが予想され、現代的意義をも有しよう。

(3)今後の展望

稲垣家旧蔵地理学関連史料の活用の便を

はかるためには、本研究で形成された基盤的成果をより完成形に近いものとし、目録の刊行と画像史料等のデジタル公開化を早期に実現する必要がある。従って、それに向けた作業を今後も更に継続していく。

またこれからは、稲垣家旧蔵地理学関連各史料の史料性の解明と解析作業をより進展させ、19世紀前半における海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態の究明に尽力していく所存である。

上記及びの成果をより多くの一般国民にも発信することを目指し、博物館等での将来的な企画展の共催にも積極的に関与していきたい。そのために、本研究期間中に情報交換をした関連博物館所属の学芸員とも、更に連絡を密にしていこうつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

吉田厚子、馬場佐十郎、『化学史事典』(化学同人)、印刷中、2014、査読有

吉田厚子、『厚生新編』、『化学史事典』(化学同人)、印刷中、2014、査読有

吉田忠、江戸の好奇心を刺激し続けた科学技術、『Back Up』33巻、pp.36-39、2013、査読無

吉田忠、窮理と実測、『科学技術と知の精神文化 IV』(社会技術研究開発センター編、丸善)第4巻、pp.61-89、2013、査読無

吉田忠、本草学 - 幕府の後押しで、薬物学から博物学へと展開、『東京人 特集「江戸の理系は世界水準！」』、第28巻第2号、pp.40-45、2013、査読無

吉田忠、江戸時代の科学思想 科学知識の継受、『日本思想史講座3 近世』(田尻祐一郎ほか編、ペリカン社)第3巻、pp.297-329、2012、査読無

Yoshida Tadashi、Lingtai Yixiang-zhi in Edo Japan、『東西科技の対話：近現代跨文化的科技交流』(国立清華大學 STS 計画編)、pp.1-30、2012、査読無

吉田忠、蘭学とラヴォアジエ化学(要旨)、化学史研究、38巻2号、pp.94-95、2011、査読無

〔学会発表〕(計 6 件)

吉田厚子、江戸時代の知識人が作成した海路記・海路略図の考察、第8回新日本古地図学会(招待講演)2013.11.9、京都大学百周年時計台記念館(京都)

吉田厚子、江戸時代の知識人が描いた二、三の北方ロシア関係地図について、第6回新日本古地図学会(招待講演)2012.5.5、京都大学百周年時計台記念館(京都)

吉田厚子、青木昆陽のオランダ語学習について - その1、実学資料研究会・洋学史学会

合同大会、2012.3.25、京都大学（京都）
Yoshida Tadashi、Lingtai Yixiang-zhi in
Edo Japan、国際検討会『東西科技の対話：
近現代跨文化的科技交流』（国立清華大學
STS 計画主催）（招待講演）、2012.1.22、国
立清華大學（台湾・新竹市）
吉田 忠、蛮書和解御用 200 周年記念シン
ポジウム趣旨説明、2011 年度洋学史学会年
大会、2011.12.10、明治大学（東京）
吉田 忠、蘭学とラヴォアジエ化学、化学
史学会年会シンポジウム基調講演（招待講
演）、2011.7.2、弘前大学（青森）

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

吉田厚子 (YOSHIDA ATSUKO)
東海大学・総合教育センター・教授
研究者番号：50408069

(2) 連携研究者

吉田 忠 (YOSHIDA TADASHI)
東北大学・東北アジア研究センター・名誉
教授
研究者番号：60004058

(3) 研究協力者

岩井憲幸 (Iwai Noriyuki)
明治大学・文学部・教授
研究者番号：60193710